

香川生物 (Kagawa Seibutsu) (22):37-41, 1995.

四国未記録のヒメタイコウチについて

豊嶋 弘

〒769-01 香川県綾歌郡国分寺町新居3369-1

松村 哲司

〒537 大阪市東成区玉津3-8-10

Discovery of *Nepa hoffmanni* Esaki (Nepidae, Hemiptera)
in the Shikoku Island.

Hiromu Toshima, 3369-1, Nii, Kokubunji-chō, Ayauta-gun, Kagawa, 769-01 Japan

Tetuji Matsumura, 8-10, Tamatsu 3 chōme, Higasinari-ku, Ōsaka City, 537 Ōsaka,
Japan

伴ほか(1988)によれば, *Nepa hoffmanni* Esaki ヒメタイコウチは日本, ソ連極東部, 朝鮮半島, 中国北部に分布している。日本では本州からのみ発見されているが, 既知の生息地は少し離れた2つの地域に限られている。すなわち, 愛知県を中心にした地域と, 少し飛び離れた兵庫県内である。

既知の生息地は愛知県下にもっとも多く, 三重, 岐阜, 静岡3県の愛知県に隣接する地域にも生息地がある。兵庫県では三田・宝塚・西宮・神戸・明石など瀬戸内側に分布するが, 知られている生息個所は少ない。

松村は香川県志度町長行付近の住宅地造成計画に関連して, 開発予定地の昆虫相を調査していたところ, 四国から未記録のヒメタイコウチを発見した。連絡を受けた豊嶋は隣接する地域も調査し, さらに数個所の生息地を確認することができた。生息地のある地区のうちで, 三木町小原~小谷と長尾町白羽にまたがる丘陵地には工業流通団地の造成が決定しているので, 長行付近と同様に開発の影響を受けることが予想される。五瀬山, 雨滝山周辺などは未調査であるが, とりあえず, 現在までに確認した生息地を記録しておく。

1. 採集記録

- 志度町成山 1♂1♀ 22. VI. 1994, ほかに幼虫・成虫合わせて13exs. を目撃。
 " 南末 1♂1♀ 13. V. 1992 (松村採集).
 " 長行 3♂3♀ 13. V. 1992 (松村採集).
 ほかに10exs. 以上を目撃。
 " 1♂3♀ 13. VI. 1993, ほかに幼虫・成虫合わせて7exs. 目撃。
 " 2♂2♀ 19. IV. 1994, ほかに幼虫・成虫合わせて12exs. を目撃。
 長尾町乙井川北(石鎚山中腹) 1♀, 幼虫 3exs.
 22. VI. 1994.
 " 長行 1♂1♀ 22. VI. 1994, ほかに成虫 6exs. 目撃。
 " 白羽 1♂1♀ 22. VI. 1994, ほかに幼虫成虫合わせて10exs. 目撃。
 三木町駒足付近 1♀, 幼虫 2exs. 22. VI. 1994.

2. 生息環境など

先に述べた伴氏らが愛知県下でおこなった調査によると, ヒメタイコウチの生息地は主として, 洪積台地または領家変成岩丘陵地と沖積平

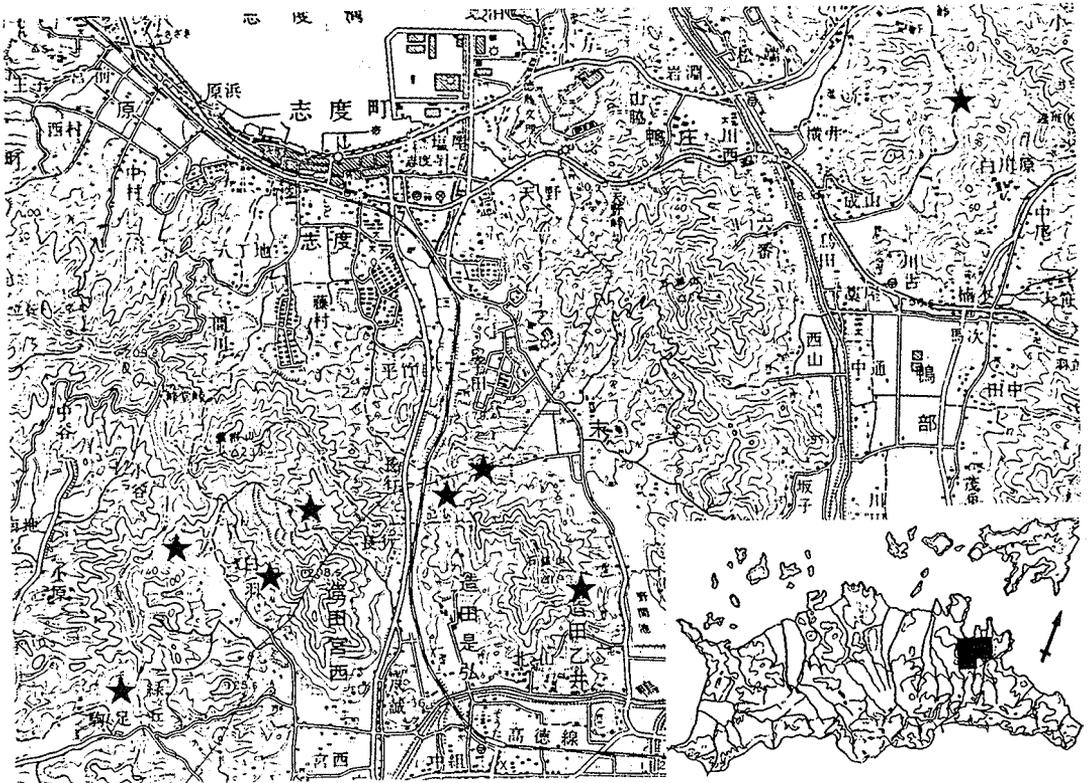


図1. ヒメタイコウチの生息を確認した地点 (国土地理院 5万分の1地形図)

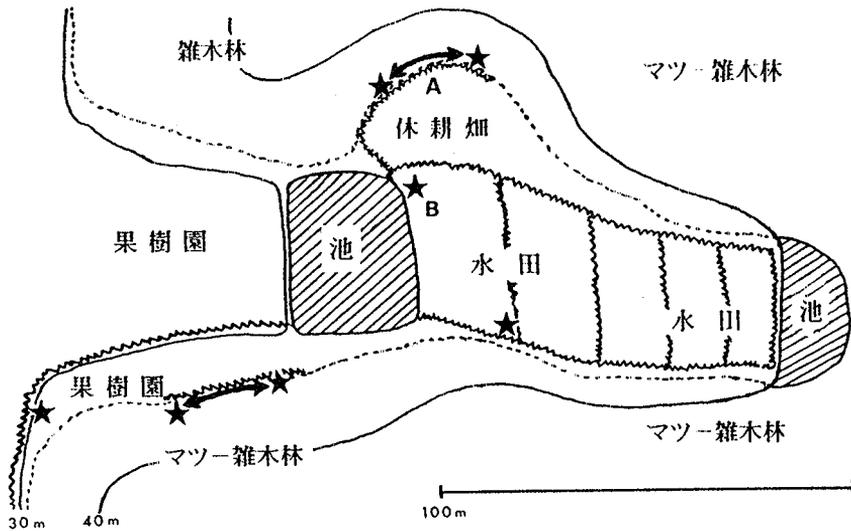


図2. 志度町長行付近における生息場所の概要
 破線：林地と草地・耕作地の境界。波線：小水路。★↔★：毎年ヒメタイコウチを
 発見した範囲。★：1回だけ少数個体を発見した場所。A・Bは図3参照。

野の境界に位置する湧き水のあるところで発見されている。生息場所は深い池ではなく、台地または丘陵と水田の境界線をなしている小水路または、その縁の草の間である。

香川県内で発見された生息場所も基本的には同じ環境である。すなわち、山麓台、洪積台地または火成岩丘陵地の谷間にある、雑木林と水田との境をなす小水路である。雑木林側の凹地や小さな谷間からしみ出た水が常に少しずつ流れており、スゲ・タデ類など丈の低い草に被われ、草の間には枯れ葉や落ち葉が適度に溜り、同時にコケが生えているような環境のところに生息している(図2~5)。同じ水路であっても、草が少なく、泥や硬い地盤がむき出しになっている場所、流れの速いところ、乾燥したところでは発見できなかった。

石鎚山中腹の生息地は山腹の凹地にできた小草地で、常に凹地の上方からしみでた水が少しずつ流れ、丈の低い草とともにコケがたくさん生えている。しかし発見された個体数はたいへん少なかった。

谷筋で、もっとも上部に位置する水田が休耕田になっていると、その周囲に上述のような環境条件を満たす小水路の形成されている場合がある(図8)。そこでは目撃された個体数が他よりやや多く、中腹や山麓の小湿地などで少数生息していたヒメタイコウチが、勢力を回復する場所になっているようである。休耕田が湿地状草地になっているときは、水路の縁だけでなく、水路から離れた中央部にも生息している。

通常は水路両縁の草や落ち葉の間に潜んでいるようで、いきなり水中から発見されることは稀である。水路の中を探しても初めはなかなか見つからず、両縁の草や落ち葉をがさがさやっていると何処からか這い出てきた(図6)。しかし例は少ないが、生息している水路の近くに

ある水田の縁で、オーバーハングの陰(図7)になっている水底をすくうと、幼虫と一緒に雌成虫の採れることもある。

松村は、近くに水路などはない山中の乾燥した場所に仕掛けたオサムシ採集用トラップに落ちた個体を得ている。

謝 辞

最後に、ヒメタイコウチの分布調査について、いろいろご援助を頂いたNS環境科学コンサルタント大阪支社片倉宏技師ほか社員の方々に厚くお礼申し上げます。

引用文献

伴 幸成ほか, 1988. 日本の昆虫(14) ヒメタイコウチ. 文一総合出版, 東京.

[図3~8説明]

図3. 生息場所の景観(1)——長行付近

矢印Aはヒメタイコウチの生息している小水路があるところ。矢印Bはヒメタイコウチが発見された水田の縁。

図4. 図3矢印Aの個所をアップ。

矢印は小水路の位置。水路の手前は草地化した休耕畑(水田跡)、後ろは土手(林縁)の草地(主にチガヤ・ケネザサ)。

図5. 草を掻きわけ、僅かに水が流れている小水路の存在を示す。

図6. 水辺の草や落ち葉の間から這い出てきたヒメタイコウチ(矢印)。

図7. ヒメタイコウチが発見された水田の縁(図3-B)。

図8. 生息個所の景観(2)——長尾町白羽付近。

矢印はヒメタイコウチが生息している小水路があるところ。水路と同じ段および上の段は湿地状に草地化した休耕水田。

